

メキシコにおける「先住民」の定義と メキシコ市内旧先住民村落の「地元民」

禪 野 美 帆

【要約】 メキシコの首都メキシコ市には、約三〇〇もの旧先住民村落が存在している。しかし現在は市街地となっており、旧来の住人だけでなく、元々縁のなかつた外来者も居住している。このような他者との相互関係において、旧来の住人には「ナティーボ（地元民）」という自称が生まれた。「ナティーボ」には固有の組織や価値観があり、それは、筆者が以前調査したオアハカ州の先住民村落の人々のそれと類似している。しかしながら、旧先住民村落の「ナティーボ」は「先住民」と呼ばれることはなく、そのように自称することもない。そこへ今世紀に入ってから、「オリヒナリオ」という呼称が彼らを指す用語として使われ始めた。そして現在、急速に自称の一つともなりつつある。そのプロセスを、メキシコにおける「先住民」や「民族集団」の定義と絡めながら論じた。

史林 九四巻一号 二〇一一年一月

はじめに

ひとつの国家のなかに複数の「民族集団」が存在するのが普通であるが、国家や研究者による「民族集団」の定義はさまざまである。また、それらの定義と当事者の考えがずれていることもよくある。一方で、他者による同意が当事者の意識に大きな影響を与えることも事実である。

現代のメキシコでは、どのような人々が「先住民」や「〇〇人」^①とされているのか。今の段階で「先住民」でなくても、

将来そのカテゴリーに入る可能性のある人々はあるのか。あるいは、新たなカテゴリーや呼称が生まれる可能性があるのか。

本稿では、メキシコの首都メキシコ市の行政変更や拡大によってその内部のみ込まれた、旧先住民村落の人々を例に、オアハカ州の一先住民村落と比較しながら、この問題について論じていく。

① 現在の文化人類学では、少なくともともメキシコの民族集団に関して、「○○族」という表記は使われず、「○○人」というのが一般的である。

② 本稿ではメキシコ連邦区(México, Distrito Federal)をメキシコ市とする。現在一六の区(delegación)がある。

第一章 現代メキシコにおける「先住民」

第一節 現代メキシコにおける「先住民」および「民族集団」の定義

著者がフィールドとしている現代のメキシコには、「先住民」、国家公用語のスペイン語では「インディヘナ(indígena)」と呼ばれる人々が、二〇〇五年の統計では約六〇二万人存在するとされる。メキシコの国立調査機関であるINEGI(国立統計地理情報院)があげているこの数字は、五歳以上で何らかの先住民言語の話者人口である。また、それはメキシコの五歳以上の人口の六・六%にあたる。^①しかし、「先住民」すべてに共通する文化要素があるわけではなく、仲間意識があるわけでもない。では「民族集団(grupo étnico)」はどうか。現在メキシコでは、民族言語集団をほぼ民族集団としてあつかっている。スペイン語以外に先住民系の言語が、グアテマラからの移民がもたらしたのも入れて六二以上あるとされ、ミシュテコ語使用者はミシュテコ人、マサテコ語使用者はマサテコ人として統計上数えられる。しかし、これはあくまでも便宜上そうしているにすぎない。この方法では、ある先住民系言語話者は先住民、同時にある民族集団の一員として数

えられ、その子どもで学校教育の影響や都市への移住等によって先住民系の言語を話さなくなった者は、統計上先住民にも民族集団にも属さない。すなわち、メキシコにおける「〇〇人」というカテゴリーは、基本的には言語集団である。^②

また、次のような問題もある。「〇〇語」といつてもそのバリエーションの隔たりは大きい。すなわち、六二の先住民系言語は、一〇〇と数えることも、二〇〇、あるいはそれ以上と数えることもできるということである。こうした状況は言うまでもないが世界中に共通することで、日本列島で使われている言語も「日本語」でなく、東北語、東京語、関西語……と名付けることもできるし、関西語を細分化して、神戸語、淡路語、大阪語、京都語……と名付けることも、またそれらをさらに細分化することもできる。メキシコのように、基本的には使用言語に基づいて民族集団の名や数を決めるのであれば、使用言語名を細分化にしたがって民族集団の数を増やすことも理屈の上では可能ということになる。

統計上、「先住民」あるいは、ある民族集団の成員として数えられている人々が、そのようなアイデンティティを持っているかどうかは場合による。他者との関係において、それを強く意識している人々や、さらにそれをおもに権利擁護や獲得に向けた社会運動につなげている人々もいる。一方で、後述のように、「先住民」や「〇〇人」と呼ばれていることは知っているが、それは当事者の意識や日常生活にほとんど関係がないという場合もある。^④

第二節 都市のメキシコ先住民

(一) 他州から流入した人々

メキシコの「先住民」は現在、どこに居住しているのか。農村部だけでなく、都市部にも居住している。とくにメキシコ経済の高度成長期が始まった一九四〇年代以降、首都メキシコ市を中心とした都市部に多くの先住民が農村部から移住した。そして、多くの場合は移住したその時点で都市の周縁だったところに居住した。^⑤さらに、移住先で次世代が生まれた。それが現在、メキシコ市とその周辺を含むメキシコ市大都市圏 (Zona Metropolitana de la Ciudad de México) の人口が

約二千万人にもなった大きな要因のひとつである。とはいえ、「先住民」の次世代は、もし先住民系の言語を失っていれば、もはや統計上は「先住民」ではない。すなわち、メキシコ市は、一世代や二世代さかのほれば「先住民」であった「市民」が大勢いるのである。メキシコ人は民族衣装などを着ていない限り、見かけでは先住民かそうでないかはわからない。アメリカ合衆国のように白人が先住民を保護区に追いやり、現在にいたるまで多くの先住民が見るからに肌の色や顔つきが異なる、という成り行きとメキシコの歴史は異なる。メキシコは約五〇〇年前に征服・植民地化され、その時以来混血も進んできた。そのため、経済的な上層部を占め、いわゆる西洋的なライフスタイルを送るメキシコ人にも、祖先をたどればどこかで先住民との混血があったということは珍しくない。

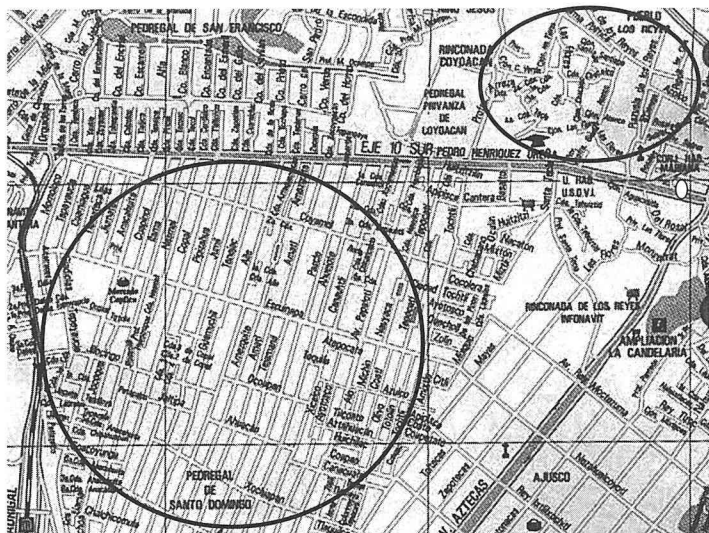
他州からメキシコ市に流入した先住民の、メキシコ市における社会関係や、政治関係、生存戦略等については、これまでも文化人類学や、社会的な研究業績が出されてきた。従来の人類学や社会学の研究では、農村からの大量の人口流入や貧困、環境汚染問題といった、都市の不均衡な側面を積極的に取り上げる傾向がある。そのため、先住民をはじめとする社会の周縁的地位に置かれた人々が研究対象となることが多い。たとえば、ロムニッツは『周縁化された者たちはいかに生きのびるのか *Como sobreviven los marginados*』において、他州の農業地域から流入した移民が多数暮らす、メキシコ市内の貧困地区を取り上げ、住人たちによる生存戦略を明らかにした。また、コーネリウスは『メキシコ市における政治と移民の貧困 *Politics and Migrant Poor in Mexico City*』において、他州からの移住者をはじめとする経済的に貧しい人々が、メキシコ市周縁の居住区でどのような政治行動を選択するのか記述した。また人類学ではルイスが一九五九年の有名な著書『貧困の文化 — 五つの家族 — *Five Families: Mexican Case Studies in the Culture of Poverty*』において、メキシコ市の貧しい地区に暮らす家族の日常を小説のように描いた。さらにルイスは、別の論文において、メキシコ市の南に隣接するモレロス州に位置する先住民村落、テポストランからの移住者が、メキシコ市においても出身村の文化を、かたちを変えながらも有し続けていることを、「解体なき都市化」という言葉を用いて強調した。

これら著名な研究において対象となつたのはいずれも、首都発展の過程で形成された貧困地区や、都市拡大の時期に他州から仕事を求めてやってきた人々である。こうした業績に続いて、メキシコ市に流入した先住民を取り上げた業績は、一九八五年のアリスベ、一九九三年のヒラバヤシ、一九九六年のモラ、拙著二〇〇六年など、いくつも出されている。これらの業績には、他州からメキシコ市へと人口が流出する社会的背景、都市移住者と母村の関係、移住先居住区での人間関係などが記述されている。

(二) 都市の内部に取り込まれた人々

メキシコ市内には、ここまで記述した、他州から流入した「先住民」とは社会背景が異なる、「先住民」とも表現し得るが、しかし統計上そのように数えられてはいない人々がいる。それは、メキシコ市の行政上の区分変更や、急激な人口増加によって、メキシコ市内部に取り込まれた、メキシコ市内あるいは周辺にかつて存在していた先住民村落の人々である。モラはその数を二九一とあげている。^⑩

都市内部の旧先住民村落としての歴史的な厚みのある地区に、祭礼や人間関係の結び方など、興味深い文化的現象が存在していたにもかかわらず、文化人類学や社会学の分野で研究対象としてとりあげられることは今世紀に入るまであまりなかった。^⑪ その理由としてはおそらく、(一)メキシコ市における旧先住民村落の境界消滅(後述)にともなう、そうした地区からの人口流出・流入が容易になり、地区および住人の「先住民的特色」が一見したところ薄れたこと、また、(二)国内の経済や機会の格差によって、先述のように農村地域から首都に流れ込む人口が急増し、それをめぐる様々な社会的・文化的現象が目立ち、先に調査・研究の対象として注目されたことのふたつがあげられるだろう。言い換えれば、旧先住民村落の文化はメキシコ市が解決に悩む「難題」ではなく、それを調査・研究する「必要性」や「緊急度」が低いため研究テーマとして取り上げられてこなかったと考えられる。^⑫



地図1 旧先住民村落と1970年代以降の市街地

出典：Guía Roji, Ciudad de México, 2002.

備考：右上の丸で囲んだ地域は旧先住民村落，左下の丸で囲んだ地域は70年代以降に築かれた市街地。

一九九〇年代後半になってようやく、旧先住民村落を対象とした民族誌的な研究がいくつか出てきた。いずれも居住者によるローカルな組織や活動が地域アイデンティティの形成にとって重要であることを指摘しており、筆者の研究関心と

共通点がある。¹⁶さらに選挙や投票行動に焦点を当てた業績も出版された。¹⁵その後、今世紀に入って、旧先住民村落に

関して、複数の著者による論考をまとめた本や雑誌の出版が次々と続いた。¹⁷これらの業績では、旧先住民村落を扱ったそれまでの業績とは異なり、後述するプエブロス・オリヒナリオスの用語が多用されている。とくにモラの『メキシコ市のプエブロス・オリヒナリオス』¹⁸—エスノグラフィック・アトラス—は、アトラスの名にふさわしく、多くの図表と写真がカラーで載せられていて、市内旧先住民村落の歴史の深さや現在の文化に魅力を感じさせるものとなっている。

これらの本の内容はほとんど、旧先住民村落が長い歴史に基づく文化を継承している点や、地元住人が結束している点、また、またメキシコの民主化プロセスに絡めてその政治行動に注目している。それは寄稿した著者のほとんどがメキシコ人であることに関係しているかもしれない。メキシコにおける文化人類学や民族学は、先住民の文化や伝

統の固有性を描き、それを尊重すべきであるとの論調か、あるいは、先住民の置かれた差別的状況を告発した業績が多い。それはこうした分野の学問が、メキシコにおいては基本的に「問題の解明や解決」のために存在しているからである。

筆者は、一九九〇年から一一年間、オアハカ州ミシユテカ高地の一村落からメキシコ市に移住した人々と母村の関係について調査し、著書にまとめた^①。その間にメキシコ市のさまざまな地区をめぐり、一九九五年には、旧先住民村落の一つであるプエブロ・ロス・レイエス (Pueblo Los Reyes) を偶然訪ねる機会があった。その際に、その地区では、他州からの移住者が多く暮らす地区と、人々の服装や職業は似ていながら、地域住人の人間関係や組織が異なることや、さらに地区の道や区画といった外観もかなり違っている(地図1の右上、丸で囲った部分参照) ことに気づいた。同地区のある家族とはその年より親交を続け、参与観察は少しずつ行っていたが、その後、二〇〇二年から複数の旧先住民村落の現地調査を始めた。その成果として、二〇〇五年の共著論文では旧先住民村落における「地元民」と「外来者」の区分について広く論じた^②。また単著論文において「地元民」同士の付き合いや組織が、若者の社会化や地域の安全保障に与える肯定的な影響について言及した^③。筆者の関心は、おもに旧先住民村落のダイナミズムにあり、同じ地域に居住する「外来者」との関係にも焦点を当てている。

ではこうした、市内旧先住民村落の人々は、自らは何と自称し、また他称されているのであろうか。また、この人々を研究者は何者としてとらえれば適切であろうか。彼らを「先住民」あるいは特定の民族集団の名で呼べるのであろうか。それを探るために、次章では、旧先住民村落居住者が組織的に集まる場や人間関係について、筆者の現地調査のデータに基づいて記述していく。

① Instituto Nacional de Estadística, Geografía e Informática.

<http://cuentame.inegi.org.mx/impresion/poblacion/indigena.asp>.

② 二〇〇〇年のメキシコ国勢調査では、先住民言語の話者があるか否

かをたずねる項目に加えて、主観的な帰属意識を問う項目が加えられ

た(報告書 INEGI, *Población Indígena de México*, 2004, pp.

112-118参照)。しかし INEGI で一般に公表されているアンケート

- 質問項目にはそのようなものが記載されていない。筆者は「メキシコにおいて先住民であるか否か」また先住民のうちの「○○人」であるかを定義する指標は、相変わらずおもに使用言語であるという立場で本稿を執筆している。しかし、民主化や多文化主義の流れを受けて、メキシコにおける先住民の定義に帰属意識が加わる可能性は十分ある。
- ② Instituto Nacional de Lenguas Indígenas. *Catálogo de las lenguas indígenas nacionales: Variantes lingüísticas de México con sus autodenominaciones y referencias geostatísticas*. 2008. <http://www.inegi.org.mx>。メキシコにおける先住民言語のインローションは三六四にのぼるとされている。
- ③ たぶんはその著書参照のこと。Rus Jan, Rosalva A. Hernández C. and Shannon L. Mattiace (eds), *Mexican Lives, Mayan Utopias: The Indigenous Peoples of Chiapas and the Zapatista Rebellion*, Rowman & Littlefield: Lanham, MD, 2003.
- ④ もともと、年々進むメキシコから人口増加と都市化が進み、周縁化したメキシコが後にメキシコではなくなるとはうー一般に見られる。
- ⑤ メキシコ市大都市圏の人口増加は、自然増と社会増だけでなく、政府が数年ごとに大都市圏に含まれる地理的領域を拡大して発表するものにも起因する。二〇〇五年の大都市圏の人口は約一九二四万人、そのうちメキシコ市は約八七二万人、周辺地域は約一〇五二万人である。INEGI. <http://www.inegi.org.mx>。『Cuaderno estadístico de la Zona Metropolitana de la Ciudad de México 2009』参照。
- ⑥ Lomnitz, Larissa A. de. *Cómo sobreviven los marginados*, Siglo XXI: México, D. F., 1975.
- ⑦ Cornelius, Wayne A., *Politics and the Migrant Poor in Mexico City*, Stanford Univ. Press: Stanford, 1975.
- ⑧ Lewis, Oscar. *Five Families: Mexican Case Studies in the Culture of Poverty*, Basic Books: New York, 1959. (高山智博(訳)『貧困の文化―五つの家族―新潮選書』一九七〇年。)
- ⑨ Lewis, Oscar. "Urbanization without Breakdown: A Case Study" *Scientific Monthly*, 75 (1), 1952, pp. 31-41.
- ⑩ Arizpe, Lourdes. *Campesinado y migración*, SEP: México, D. F., 1985 / Hirabayashi, Lane Ryo. *Cultural Capital: Mountain Zapotec Migrant Associations in Mexico City*, Univ. of Arizona Press: Tucson, 1993. / Mora V., Teresa. *Nanunditzi y la Sociedad de Allende en México: Un caso de migración rural-urbana*, INAH: México, D. F., 1996. / 禰野美帆『メキシコ「先住民共同体」都市へ都市移住者を取り込んだ「伝統的」組織の姿容―慶應義塾大学出版部 二〇〇六年。』
- ⑪ Mora V., Teresa (coord), *Los pueblos originarios de la ciudad de México: Atlas etnográfico*, INAH / GDF: México, D. F., 2007, p. 28.
- ⑫ 歴史研究によれば、メキシコ市中心部に位置する先住民居住区の一、九世紀から二〇世紀初頭にかけての姿容を扱った業績がある。Lira, Andrés. *Comunidades indígenas frente a la ciudad de México: Tenochtitlan y Tlatelolco, sus pueblos y barrios*, 1812-1919. El Colegio de México: México, D. F., 1983.
- ⑬ ただし、旧先住民村落に相当する地域が、すべて同じ地域とメキシコ市の諸問題「すなわち土地の不法占拠、住宅や上下水道整備、森林保護、貧困対策などの研究対象とされるメキシコ」は異なる。以下参照：Durand, Jorge. *La ciudad invade al ejido: Proletarianization, urbanización y lucha política en el Cerro del Indio*, D. F., CIESAS: México, D. F., 1983. / Azuela, Antonio. *La ciudad, la propiedad privada y el derecho*, El Colegio de México: México, D. F., 1989. / Scheingart, Martha y Clara E. Salazar. *Expansion urbana, sociedad*

y ambiente, El Colegio de México: México, D. F., 2005.

- ⑭ ナニシピオの繁華を参照(シラス) Portal A., Maria Ana Ciudadanos desde el pueblo: Identidad urbana y religiosidad popular en San Andrés Totoltepec, Tlaxpan, México, D. F., CONACULTA / UAM-Iztapalapa: México, D. F., 1997. / Sata B., Patricia, Vecinos y vecindarios en la ciudad de México: Una construcción de las identidades vecinales en Cozacán, D. F., CIESAS / Miguel Ángel Porria: México, D. F., 2001. / Mora V., Teresa (coord.), La fiesta patronal de San Bartolomé Amesalte, INAH: México, D. F., 2003.

- ⑮ Robinson, Scott S. (coord.), Tradición y oportunismo: Las elecciones de consejeros ciudadanos en los pueblos del Distrito Federal, Colección Sábado Distrito Federal: México, D. F., 1998.

⑯ 以下の参照(シラス) Yanes, Pablo, Virginia Molina y Oscar González (coords), Ciudad, pueblos indígenas y etnicidad, UCM: México, D. F., 2004. / Medina H., Andrés, La memoria negada de la

Ciudad de México: Sus pueblos originarios, UNAM / UACM: México, D. F., 2007. / Mora V., Teresa (coord.), Los pueblos originarios de la ciudad de México: Atlas etnográfico, 2007 (複製) / Argumentos: Estudios críticos de la sociedad, Vol. 59, UAM: México, D. F., 2009.

⑰ 「メキシコ・オリビナリクス」は「メキシコ・オリビナリオ」の複数形である。

⑱ 神野美帆「メキシコ、先住民共同体と都市——都市移住者を取り込んだ「伝統的」組織の変容——」二〇〇六年(前掲)。

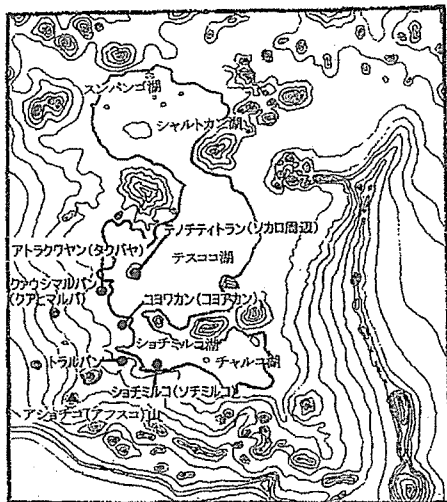
⑲ 神野美帆・井上幸孝「メキシコ市内旧先住民村落における『地元』と『外来者』の関係」『メソアメリカにおける民族のマイナリティの揺らぎ』神戸市外国語大学外国学研究所 二〇〇五年 一一—二二六頁。

⑳ 神野美帆「メキシコ市内旧先住民村落における『地元民』コ「メニテイ」」『三田社会学』一〇号 二〇〇五年 五七一—六六頁。

第二章 「ナティイボ(地元民)」の生成とその組織

第一節 調査地区の概観、調査方法と調査期間

メキシコ市には、メキシコ全土同様に、革命後の一九一七年憲法によって、ムニシピオ・リブレ(municipio libre)以下、ムニシピオと略す)という、ある程度の自治が認められた行政区の設置が認められた。それにしたがって、メキシコ市内部の先住民村落は行政上ムニシピオとして存在することとなった。しかし、憲法改正によって、一九二九年以来、メキシコ市内のムニシピオは消滅した。すなわちその境界はなくなり、全てメキシコ市内の区(delegateación)内部に取り込まれた。



地図2 征服直前のメキシコ盆地

出典：禪野・井上共著，2005年（注参照），6頁。

都市にのみ込まれ、市の一部となり、行政上の境界線は失われても、それらはメキシコ市内の「地区」として残っている。地区の名も、植民地時代以来の地名に由来しているのが一般的である。現在それらの地区には外部から様々な者がやってきて居住している。すなわち、新旧住人が同じ地区に暮らしているのである。また、そうした地区の旧来からの居住者は、そうした地区をしばしば「村」を指す「プエブロ pueblo」と呼んでいる^①。これはメキシコ市内で先住民村落としての歴史を持たない地区では、まったく耳にしない表現である。

旧先住民村落の地理的位置について簡潔に説明しよう。現在のメキシコ市の大半は、征服された一六世紀には湖の中であつた。しかし都市化にともなつて湖は陸地に変えられ、現在、市内では南部のソチミルコ区、南東部のトラワク区でわずかに見えるだけである。旧先住民村落は少なくとも植民地時代には陸地（湖中の島も含む）だつたところに存在する（地図2）。

著者は、二〇〇二年九月以来、計七回の短期調査を行い、先住民村落であつた市内地区のうち一七地区を訪れ、さらに、現在は失われているが、かつては一七地区のうちの四地区の一部であつた旧エヒード（*ejido*、後述する共同利用地の一種）も訪れた（表1）。これらの旧エヒードは現在は分離した市街地区になつている。旧先住民村落と旧エヒード、合計二一の地区にわたる調査は、一八カ所でカトリック教会訪問、八カ所でカトリックの祭礼観察、一カ所でカトリックの祭礼遂行に向けた集金活動参加、一一カ所で地域墓地訪問、一カ所の地域墓地での死者の日の行事参加、二カ所で独立記念日の行事観察、二カ所でティエラ・コムナル（*tierra comunal*）

表1 旧先住民村落調査地一覧 (2002-2010)

現在の区 (delegación)	現在の地区名 ([]内は失われた共同利用地である旧エヒーの現在の地区名)
コヨアカン (Coyoacán)	プエブロ・ロス・レイエス (Pueblo Los Reyes) [ペドレガル・デ・サント・ドミンゴ (Pedregal de Santo Domingo)] ラ・カンデラリア (La Candelaria) バリオ・クアドランテ・デ・サン・フランシスコ (Barrio Cuadrante de San Francisco) バリオ・ニニョ・ヘスス (Barrio Niño Jesús) バリオ・サン・ルーカス (Barrio San Lucas)
アルバロ・オブregon (Álvaro Obregón)	チマリスタック (Chimalistac) プエブロ・サン・バルトロ・アメイアルコ (Pueblo San Bartolo Ameyalco)
ラ・マグダレーナ・コントレーラス (La Magdalena Contreras)	サン・ヘロニモ・リディセ (San Jerónimo Lidice) [サン・ヘロニモ・アクルコ (San Jerónimo Aculco)] プエブロ・サン・ベルナベ・オコテベック (Pueblo San Bernabé Ocotepec) [セロ・デル・フディオ (Cerro del Judío)] プエブロ・サン・ニコラス・トラパン (Pueblo San Nicolás Totolapan) [ペドレガル・デ・サン・ニコラス Pedregal de San Nicolás] プエブロ・ラ・マグダレーナ・コントレーラス (Pueblo La Magdalena Contreras)
クアヒマルパ・デ・モレーロス (Cuajimalpa de Morelos)	サン・マテオ・トラルテナンゴ (San Mateo Tlaltenango) サン・ペドロ・クアヒマルパ (San Pedro Cuajimalpa)
トラルパン (Tlalpan)	サント・トマス・アフスコ (Santo Tomás Ajusco) プエブロ・サン・ミゲル・アフスコ (Pueblo San Miguel Ajusco) サンタ・ウルスラ・シトラ (Santa Úrsula Xitla)
ベニート・フアレズ (Benito Juárez)	トラコケメカトル・デル・バジェ (Tlacoquemecatí del Valle) =旧サン・ロレンソ・ソチマンカ (San Lorenzo Xochimanca)

「comune」、共同利用地の一種）訪問を含み、それ以外にも複数の家族のいくつかの家庭行事（食事会、誕生会、買い物、散歩など）に参加している。

以下では、これらの地区の住人のうち「地元民」意識を持つ人々とその組織について記述する。

第二節 「ナティエボ（地元民）」の生成

これら旧先住民村落が位置する区に特徴的なのは、外部から多くの人口が流入しているということである。旧先住民村落を多く有している区の人口増加率はメキシコ市全体の人口増加率よりも高い^③。また、ラ・マグダレーナ・コントレーラス区の公式ウェブサイトによれば、同区の出生率は顕著に落ちているにもかかわらず、人口は急増している^④。すなわち、外部からの流入者が多いことがわかる。外部からの流入は、他州からメキシコ市に流入する人口と、市内部で早く都市化された地区から移動してくる場合がある。ラ・マグダレーナ・コントレーラス区の役場で勤める人物の話によれば、一九八五年の

表2 旧先住民村落が多く存在する区とメキシコ市全体の人口増加の推移 (1950-2005)

	1950年	1960年	1970年	1980年	1990年	2005年
メキシコ市	3,050,442	4,870,876 (59.7%)	6,874,165 (41.1%)	8,360,192 (21.6%)	8,351,045 (-0.1%)	8,720,916 (4.4%)
アルバロ・オブregon区	93,176	220,011 (136.1%)	456,709 (107.6%)	604,643 (32.4%)	651,752 (7.8%)	706,567 (8.4%)
コヨアカン区	70,005	169,811 (142.6%)	339,446 (99.9%)	566,252 (66.8%)	649,027 (14.6%)	628,063 (-3.2%)
クアヒマルパ・デ・モレーロス区	9,676	19,199 (98.4%)	36,200 (88.6%)	86,725 (139.6%)	121,344 (39.9%)	173,625 (43.1%)
イスタパラバ区	76,621	254,355 (232.0%)	522,095 (105.3%)	1,199,582 (129.8%)	1,511,366 (26.0%)	1,820,888 (20.5%)
ラ・マグダレナ・コントレラス区	21,955	40,724 (85.5%)	75,492 (85.4%)	164,558 (118.0%)	197,772 (20.2%)	228,927 (15.8%)
ミルバ・アルタ区	18,212	24,379 (33.9%)	33,694 (38.2%)	50,788 (50.7%)	64,545 (27.1%)	115,895 (79.6%)
トラウアック区	19,511	29,880 (53.1%)	62,419 (108.9%)	139,595 (123.6%)	209,594 (50.1%)	344,106 (64.2%)
トラルバン区	32,767	61,195 (86.8%)	130,719 (113.6%)	350,934 (168.5%)	491,654 (40.1%)	607,545 (23.6%)
ソチミルコ区	47,082	70,381 (49.5%)	116,493 (65.5%)	206,402 (77.2%)	274,947 (33.2%)	404,458 (47.1%)

出典：Garza, Gustavo (coord.) *La Ciudad de México en el fin del segundo milenio*, El Colegio de México/ GDP: México, D.F., 2000, p. 248, p. 540, p. 560, p. 566, p. 592, p. 598, p. 612, p. 625, p. 639. / II Censo de Población y Vivienda 2005, INEGI.

備考：上段の数字は人口，下段の（ ）内の数字は，左の列の年から右隣の列の年までの人口増加率。1950年から1960年の人口増加率の算出は，(1950年の人口に対する1960年の人口の増減数 ÷ 1950年の人口) × 100による。増加率の単位は小数点第二位を四捨五入した。

メキシコ市における大地震の後、深刻な被害を受けた中心部に近い方から、同区に移動する人口が増えたという。同様のことはクアヒマルパ・デ・モレーロス区の公式ウェブサイトにも記してある。^⑤

実際のところ、調査した二一の地区すべてに「外来者」が居住している。そして、「外来者」と共存しているからこそ、これらの地区の居住者がよく使う言葉がある。それはスペイン語で「地元民」を意味する「ナティーボ (nativo)」である。さらに、「この者」という意の「ser de aquí」、「この生まれ」の「nacer aquí」、「親戚」や「仲間」を意味する「familiar」という表現も使われている。同時に「ナティーボ」は、外部出身の居住者を、居住者を意味する「アベシンダード (vecindado)」や「レシデnte (residente)」と呼んでいる。

一方で、筆者が一九九〇年より調査してきたオアハカ州、ミシユテカ高地の一村落ではその

ような表現はまったく聞かれぬ。なぜなら居住者のほぼ全員がその村で出生したか、もしくは村出身者と婚姻関係にある者で、村出身者と縁のない完全な「外来者」はいないからである。すなわち、「ナティーボ」であることを主張し、見せる対象が存在しない。言い換えれば、「ナティーボ」であることにアイデンティティを求める必要がないのである。もつとも旧先住民村落における「ナティーボ」の範疇や境界は後述するようにあいまいなものである。

「ナティーボ」となる個人の範疇はあいまいであるにせよ、自称「ナティーボ」が中心となっている組織が、旧先住民村落には複数存在することが調査から明らかとなった。それらの組織および活動を簡潔に整理して紹介しよう。^⑦

第三節 「ナティーボ」によるカトリックの祭礼遂行

かつて先住民村落であった地区には必ずカトリック教会がある。どの地区にもその教会に置かれている聖像をまつる祭礼があり(写真1)、同時に祭礼を遂行する組織がある。メキシコ各地において、カトリックの祭礼を遂行する組織はふつう「マヨルドミア (mayordomía)」と呼ばれるが、調査地の複数の場所では「祭礼委員会」を意味する「コミシオン・デ・フェステホ (comisión de festejo)」という、より現代的な呼称がつけられている。いずれもその活動目的は同じで、祭礼に必要な資金の調達^⑧、祭礼におけるミサの準備、聖像を担いでの行列 (procession)、祭礼をにぎやかに盛り上げる音楽隊^⑨の手配、祭礼遂行に協力した人々に無償で提供される食事や飲み物の準備と給仕、祭礼期間中の娯楽行事の手配など、祭礼の準備と遂行において中心的な役割を果たしている。

観察したところ、祭礼遂行組織の成員の多くは、「ナティーボ」を自称する人々である。「外来者」は娯楽行事を見に来たり、ミサだけ参加したり、祭礼期間中教会周辺に立つさまざまな露店や移動遊園地へ遊びに来るなど、参加のしかたは限られている。祭礼の準備には時間がかかり、特に資金集めは何日も家々を訪ね歩かなければならず、重労働である。しかし、サン・ヘロニモの祭を準備期間から観察したところ(二〇一〇年)、活動中、委員の成員たちは結束し、いきいきと



写真1 聖像を担ぐ「ナティーボ」たち(サン・ヘロニモ・リディセ地区)(2010年撮影)

している。いわば同好会的な楽しさもあるのである。教会に貢献することはまた、外部から流入した者が「ナティーボ」になることのも条件ともなっているようだ。たとえば、プエブロ・サン・ミゲル・アフスコ(Pueblo San Miguel Ajusco)では、一九六〇年頃グアナフアト州から移り住んだという、二〇〇二年当時八〇代の男性に、この地域の墓地の入口で出会ったが、彼はこの地域のために、「大いに奉仕し(servi mucho」と表現していた)、「カトリック教会でサクリスタン(Sacristan)^⑩の役を務めた」ことを誇らしげに語っていた。この人物は当時同地区の墓守をしていたが、それはもはや「ナティーボ」との接触がほとんどないような「外来者」ではないことを示している。また歴史研究者井上幸孝氏が二〇〇三年に得た別の事例としては、三〇年程前に他州からアルバロ・オブレゴン区の旧先住民村落プエブロ・デ・テテルパン(Pueblo de Terapan)に移住してきた当時五〇代の男性が、同地区の祭礼委員会の一員となっており、同委員会の他のメンバーとともに「村の者」同然の振る舞いをしていったという。

外部からやってきた者が「ナティーボ」になる、そうなりたいと願う、あるいは「ナティーボ」と多くの活動をともにしているのは、これまでの観察では、「ナティーボ」とほぼ同じ社会階層に属す人々である。一般にこうした地区の「ナティーボ」の多くは非熟練肉体労働者である。他州の農村などから流入した人々も首都では同様の労働者であり、そのライフスタイルは身なりも含めてかなり似ている。こうした階層の「外来者」は、観察したところ、調査した地区のなかではトラルパン区やラ・マグダレーナ・コントレーラス区の山間部などにある、都心へのアクセスが相対的に悪く、経済的に豊かな「外来者」があまり多く流入していない旧先住民村落に多く居住している。

一方、コヨアカン区は現在では非常に便利な地区で、大学都市からも近い。たとえば同区内のプエブロ・ロス・レイエスには大きな邸宅や豪華な集合住宅が数多く存在する。そのような家で暮らす社会階層の高い人々は、「ナティーボ」と関わることは通常ない。彼らはほとんどの場合、地区の外にある教会で洗礼を受け、結婚式をあげ、地区外の学校に通い、地区外で働き、地区外の店や病院を利用している。車で自宅から出かけて帰ってくるので、路上で「ナティーボ」と会話を交わすこともあまりない。しかし、この地区の祭礼遂行責任者であるマヨルドモ (mayordomo) の役を何回か務めた男性によれば、こうした普段付き合いない経済的に豊かな「外来者」の多くが、祭礼のために献金を要求されると応じるという。また、ラ・マグダレーナ・コントレーラス区の中でも大学都市や幹線道路に近いサン・ヘロニモ・リディセ (San Jerónimo Lidiçe) は、村の中心を貫く通りにも車が頻繁に通っていて、プエブロ・ロス・レイエス以上に都市化された地区であるが、ここでも「外来者」は経済的に豊かである。そして、そうした「外来者」による祭礼のための献金額は少なくないと、同地区の祭礼委員会の成員も述べている。

第四節 「ナティーボ」の墓地と埋葬

調査地のほとんどには墓地がある(写真2)。地域住人はかつてカトリック教会の敷地内に埋葬されていたが、人口増加



写真2 「ナティーボ」を埋葬する墓地(ラ・カンデラリア地区)(2007年撮影)

にともなつて次第に墓地が整備されていった。墓地にある墓標のもつとも古い日付から判断すると、一九五〇〜一九六〇年代に整備された墓地が多い。この時期はちょうどメキシコ市内のなかでも調査地域が位置する区で人口が急増した頃と一致している。これらの墓地は場合によっては非常に小さく、市販の地図に記載されていないものもある。

墓地の敷地は、コヨアカン区、ラ・カンデラリア(La Candelaria)の住人によれば、地域住人で購入したり、寄贈による場合もあるという。すなわち、この場合は地域住人の共同所有ということになる。ラ・カンデラリアのカトリック教会に隣接する墓地がそのような共同購入によるものであるかは、まだ調査で明らかになっていないが、メキシコ市で最も売れている地図、Gua Rojiの最新版(二〇一〇年発行)に載っていない。さらに、墓地の中には、地区の共同利用地(後述)であるエヒードを墓地にしたもの(Panteón ejidal)もある。クアヒマルバ・デ・モレーロス区(サン・ペドロ・クアヒマルバ(San Pedro Cuajimalpa))の区営墓地内に、墓地の管理事務所があるが、そこで働いている男性にきいたところ、同区の中では、サン・マ

テオ・トラルテナンゴ (San Mateo Tlatenango) 、サン・ロレンソ・アコピルコ (San Lorenzo Acopico) 、サン・パブロ・チマルパ (San Pablo Chimalpa) の墓地がエヒードを墓地にしたもので、そこでは埋葬の権利等に関して、公営墓地の規定に沿った運営は必ずしもされていないということである。その三つの墓地のうち、サン・マテオ・トラルテナンゴの墓地は、先の地図に掲載されていない。

一方で、ラ・マグダレーナ・コントレーラス区にあるプエブロ・サン・ニコラス・トトラパン (Pueblo San Nicolas Totopan) の墓地は「区営」、すなわち公営である。それにもかかわらず、二〇〇二年の時点では、埋葬の権利には「ナテイーボ」と「外来者」の線引きが存在していた。墓地管理委員を務めていた女性に当時聞いた話によれば、「ナテイーボ」のみに永代埋葬の権利があるのに対して、外部出身の居住者の場合、埋葬は可能であるが七年間に限られ、この期間を過ぎた後は、屋外の壁面に設置された納骨用のロッカーのようなもの (壁龕墓 *Ermita* と呼ばれる) に入れられる。また、同地区の出身者であっても、そこに居住していなかった場合は埋葬できないこともあるという。

トラルパン区のプエブロ・サン・ミゲル・アフスコでは、先述した墓守の老人によれば、地元と外部の者で埋葬にかかる費用が異なる。ただしお金を払えば誰でも入れるとこの人物は述べている。被葬者の決定は墓地に空間的余裕があるか否かによっても異なるという可能性がある。実際に、メキシコ州との境界近くに位置するプエブロ・サン・ミゲル・アフスコの墓地はかなり広い。墓地における埋葬の権利の差は、墓地の面積以外に、敷地が、(一) 区の所有、(二) エヒード、(三) 共同所有のどれであるか、また、地区に居住する「外来者」の数や階層にも影響を受けている可能性がある。さらに、旧先住民村落には、多くの場合、墓地を管理する委員会が地区内にあり、「ナテイーボ」やナテイーボと同様のライフスタイルを持つ者が委員となっている。これまでの調査では富裕層の「外来者」が墓地管理委員会の成員になっている例は、祭礼委員会の場合と同様で、見られない。

第五節 「ナティーボ」の水利権

前述のように、旧先住民村落は先スペイン期から、少なくとも植民地時代には陸地であった。すなわち、湖の周りの陸地か、湖中の小島であった。そして人間が暮らすには不可欠な水が手に入っていた場所である。たとえば、サン・ヘロニモ・リデイセ、プエブロ・デ・ラ・マグダレーナ・コントレーラス (Pueblo de La Magdalena Contreras)、チマリスタク (Chimalistac) といった地域は川の近くに位置している。また、プエブロ・ロス・レイエスは、かつては湖岸に近かった。さらに、プエブロ・サン・バルトロ・アメヤルコ (Pueblo San Bartolo Ameyalco) には豊富な湧き水があり、独自の洗濯場兼水汲み場がある。そこでは「ナティーボ」、あるいは「外来者」でもそれと近いライフスタイルを持つ人々が洗濯したり、家庭で使用する水を汲む光景が見られる。同時に彼らの社交場ともなっているようだ。一方で「ナティーボ」とはほぼ無縁の生活をしている富裕層向けコンドミニアムの住人の話では、雨期で水が豊富な時は地区の湧き水を使用し、乾期で水が足りなくなるとプエブロ・サン・バルトロ・アメヤルコ側から給水を拒否され、コンドミニアムの住人共同で私営企業から給水車を呼び、水を買っているとのことである。

すなわち、この地区では水利権を握っているのはいわゆる「ナティーボ」であり、同じ地区に新築された豪華なコンドミニウムに水を与えるかどうか、彼らが決定していると考えられる。ただしこのような行動は、地区内の「ナティーボ」の人数の方が多くなければ可能とはならないであろう。都心へのアクセスのよい地区では「外来者」の数が多く、「ナティーボ」が水利その他生活に不可欠なものに関して決定権を握るのは困難になると思われる。先述のサン・ヘロニモ・リデイセではすでに、上下水道は完全に都市化されていて、「ナティーボ」、「外来者」問わず、居住者に水利権というものはない。

調査地のいくつかには、共同利用地であるエヒードおよびティエラ・コムナルがある。こうした土地は、私有地と異なり、共同体で管理、利用するものである。いずれの場合も、耕作地については個々の成員に分割されて個別に耕作されているのが一般的である。エヒードとは、一九一五年以降の農地改革の際に導入された土地制度で、大土地所有制を解体した後で農民に分割された一定の範囲の土地を、複数の農民が共同で利用権を有するが、土地そのものは国家に属するというものであった。しかし一九九二年の憲法改正によつて売買が許され、私有地化への道が開かれた^⑫。一方、ティエラ・コムナルは植民地時代から土地を共同所有していた村落に対して、国家がその土地に対する権利を確認したものである^⑬。ティエラ・コムナルは現在も私有地化の対象にはなっていない^⑭。

プエブロ・サン・バルトロ・アメヤルコでは、二〇〇二年、コムネロ（ティエラ・コムナルの成員）の会合の告知が通りに貼つてあるのを見かけた。そこでは、新たに成員となることを希望する者の承認が議題の一つとしてあげられており、集団的な土地利用を支える組織が存在していることがわかる。土地に絡む問題は非常にデリケートであるため、この会合の詳しい内容はまだ筆者には明確になつていない。

いずれにしても、コムネロは、前述のティエラ・コムナル創設の経緯からしても、基本的に「ナティーボ」がなることができるものである。仮に「外来者」がコムネロになる可能性があるとしても、「ナティーボ」の承認が必要である。

① メキシコ市内の旧先住民村落には、「プエブロ」が地名に入つている地区と、そうでない地区があるが、いずれにしても旧来からの住人は居住地区を「プエブロ」と呼んでいる。また、サン・ロレンソ・ンチマンカ (San Lorenzo Xochimanca) は現在、オフィス、高級マン

ション、商店、ショッピングセンターに囲まれているが、すでに地名そのものが行政上は消えて、トラコケメカトル・デル・バジェ (Tlacuahuacatl del Valle) という地区の一部となっている。しかし、旧来の住人はサン・ロレンソ教会周辺を以前の名で呼んでいる。

- ② なお、二〇〇二年九月と二〇一〇年九月の現地調査は歴史研究者・井上幸孝氏と共同で行った。
- ③ ただし、大都市市 (Ciudad Universitaria) に近く、他地域よりも都市化されているコヨアカン区では一九九〇年以降顕著な人口増加は見られなご。
- ④ http://www.mcontreras.dgob.mx/demografia/evol_demog.html
- ⑤ <http://cuajimalpa.org/historia/>
- ⑥ その村では、婚姻以外の理由で他村から人が流入した例はほとんど存在せず、唯一筆者が知った事例として、隣村から何らかの事情で移り住んだ男性(数年前に死亡)がいる。彼は村内のある家族の下男のような暮らしをしていたが、村人全体から侮蔑的な扱いを受けていた。本人は「村の耕作地を与えられたことはない」と語っていた。
- ⑦ 事例に関して、本稿で扱わない部分については、禪野美帆・井上幸孝「メキシコ市内旧先住民村落における『地元民』と『外来者』の関係」二〇〇五年(前掲)参照。
- ⑧ それは、一定額を決めて徴収する方法と、額は決めずにそれぞれの意志に応じた額を徴収する方法がある(いずれも献金を拒否される場合もある)。サン・ヘロニモ・リデイセの祭礼委員会は後者の仕方である。「ナティーボ」だけでなく、「外来者」の家々も訪ね、献金を募っている。
- ⑨ ほとんどの場合、ブラスバンドがひとつは呼ばれている。他にも資金があればマリアッチの楽団を呼ぶ場合がある。楽団は、「あそこのブラスバンドがいらしい」などの噂があり、交渉して呼んでいる。
- ⑩ サン・ニコラス・トラパンの祭礼(二〇〇二年観察)ではロデオ(暴れ牛に男性が乗り、振り落とされたい者が勝者となる。日本では暴れ馬のロデオが映画などで知られている)、サン・ロレンソ・ソチマンカの祭礼(二〇〇九年観察)では笑い話や伝承を語るグループ、サン・ヘロニモ・リデイセの祭礼(二〇一〇年観察)ではオーケストラ、ラテン・ジャズのバンド、社交ダンスなど、様々である。
- ⑪ 一般にカトリック教会の聖具を管理する係を指す。
- ⑫ 石井章『ラテンアメリカ農地改革論』学術出版：東京、二〇〇八年、六三―六四頁。
- ⑬ Gynnet David, *From Ejido to Metropolis, Another Path: An Evaluation on Ejido Property Rights and Informal Land Development in Mexico City*, Peter Lang: N. Y. 1992, pp. 75-76.
- ⑭ とはいえ、筆者が調査してきた、オアハカ州、ミシユテカ高地の村落は、その地理的領域すべてがティエラ・コムナルであるにかかわらず、実際には、個々人に分割された耕作地が村人同士にかぎって売買もされている。このようなケースは他にも多く存在すると思われる。

第三章 メキシコ市内旧先住民村落「ナティーボ」は「先住民」か ―オアハカ州一先住民村落との比較―

ここまで記述したように、メキシコ市内旧先住民村落には、地元民を意味する「ナティーボ」を自称する人々があり、ほとんど「ナティーボ」に閉じた組織や活動が存在している。「ナティーボ」は現在のメキシコで統計上は何者になるのか。結論を言えば、それは「メキシコ人」で「メキシコ市民」である。すなわち、「先住民」でもなく、また、かつては

それらの地域で話されていたナワトル語やオトミー語も今は話されていないため、「ナワ人」や「オトミー人」でもない。しかし旧先住民村落の「ナティーボ」の組織形態や言動は、著者が一九九〇年から二〇〇一年まで調査したオアハカ州の先住民村落の人々のそれと多数の共通点がある。以下、第一節では、オアハカ州の一村落について、その概観につづいて、祭礼、墓地、共同利用地等について簡潔に記述する^①。そして第二節では、メキシコ市内旧先住民村落の「ナティーボ」との類似性について記述する。

第一節 オアハカ州、先住民村落の自称、祭礼、墓地、水利権、共同利用地

ここで例としてとりあげる村、サン・マルティンは、メキシコの南部、オアハカ州の高地ミシユテカ（ミシユテカ・アルタ Mixteca Alta）と呼ばれる山間部に位置しており、総面積は四五・一平方キロメートルである。行政的にはムニシピオ（municipio）という、国家行政の最小基本単位となっている。この村での筆者の調査の終了期間にあたる二〇〇〇年一月に村役場で作成された統計によると、人口は六八一人、世帯数は二一四であるが、これは、「村に居住している者とその世帯」の数である。すなわち、村外に居住している者を含んでいない^②。INEGIによる二〇〇五年の人口（注^②で記したようにトトメンドをのぞく）は七六六人とあるが、同様の数え方をしていると考えられる。二〇〇〇年の時点で、村で出生した者のうち少なくとも四六％は村外に居住していた^③。移住先で最も多いのは首都のメキシコ市で、出生登録人口の二五％を占めていたが、二〇〇〇年頃からアメリカ合衆国へと流出する者が顕著に増えてきた。

村にはいくつかの組織がある。それはおもに村役場を中心とした行政的組織と、祭礼の遂行を中心とした宗教的組織に分けることができる。それらの組織の仕事は、サン・マルティンでは「カルゴ（cargo）」と呼ばれている。カルゴとはスペイン語で義務的な職務を意味する。それは、村の行政のおよび宗教的なさまざまな役職を世帯主が担う義務を負うというもので、行政的役職の場合、一年間もしくは三年間の無償奉仕となり、宗教的役職の場合はカトリックの祭礼を遂行す

表3 サン・マルティン在住者によるさまざまな「名乗り」

名乗り	選択の状況もしくは意識される他者
a. サン・マルティンの者	村人同士の会話で自然に表出／近郊の他の村の人々やアヘンシア・ムニシパルの人々に対して
b. サン・マルティン内の集落の者	村人同士の会話で自然に表出／村内の他の集落の人々に対して
c. オアハカの方	オアハカ州の外の都市部へ出て行ったとき、オアハカ州の出身者でない人々に対して
d. メキシコ人	外国人(=非メキシコ人)に対して
e. 農民	農民でない人々や都市部で生まれ育った者に対して
f. ミシュテコ人	研究者や外国人に対して
g. インディオまたはインディヘナ	研究者や、インディヘナのカテゴリーに入れられていない外部の人々に対して

出典：禪野美帆，2006年（注参照），60頁。

備考：出身地や出自に関する「名乗り」に限定する。すなわち、性別や年代、家族関係などに基づくものは除外する。

るが、そのためにかかる費用も調達しなければならず、大きな経済的負担がかかる。これらのカルゴは成人してから年老いて働けなくなるまで数年ごとに担い続けなければならない。行政的および宗教的カルゴは植民地時代に起源があり、ラテンアメリカの広い地域の村落社会に見られるが、現在にいたるまで変遷してきており、またその形態にも各地で多様性がある。しかしサン・マルティンの人びとにとっては、サン・マルティンのカルゴは所与のものであり、これまで続けてきた、そしてこれからも続けるべき習慣である。

サン・マルティンのカルゴは右記の二種類に加えて、村が近代化するにつれて、新たな機関が創設されるたびに増えている。たとえば、小学校や中学校のPTA、考古遺跡博物館の役員、衛星公衆電話のオペレーター（現在は携帯電話等発達したため廃止）など、サン・マルティンではすべて無償奉仕の役職であり、「カルゴ」と呼ばれる。

サン・マルティンでは、カルゴへの就任は村長より指名される。立候補があった場合でも、最終的には村長から任命される。そのような大きな力をもった村長は、村在住の世帯主が集会を開き、推薦および拳手によって選出される。選ばれた者は、たとえ三年間の無償奉仕が不都合であっても拒むことは許されない。すなわち、村長は、「村人の総意」によって「村長というカルゴ」を強制的に担わされた者である。したがって、村長によるカルゴへの指名および任命は「村の決定」としての権威をもつのであり、同時に村長か

らの任命を拒むことは「村の決定」を否定することを意味する、と解釈できる。村のカルゴは、(一)以下に簡潔にまとめるさまざまな行事や組織と関連している。それらについて記述する前に、まず、サン・マルティンの人々の他称および自称について記述する。

(一) サン・マルティン居住者と移住者の他称と自称

この村の居住者は統計上何者とされているのか、他者から何と呼ばれているのか、また、何と自称しているのか。統計上、ミシュテコ語を失った大半の村人は先住民の数に入らないが、^⑥研究書の「ミシュテコ人居住地区」には入っている。サン・マルティンに隣接し、幹線道路からサン・マルティンより奥に位置する、サン・ファン・ヌミ(San Juan Nuni)では今もミシュテコ語話者が多いので、サン・マルティンでミシュテコ語が失われた背景には都市へのアクセスの良さも影響しているのだろう。サン・マルティンの居住者は、自分たちが「先住民」や「ミシュテコ人」と言われる存在であることは知っている。では自称はどうか。それは、一般に自称というものがさうであるように、誰を他者として認識しているかによって、状況に応じた使い分けがある。しかし、表に示したように、最も頻繁に口にする自称は「村人」もしくは「サン・マルティンの者」である(表3)。

一方で、前述のように、自称「ナティーボ」はいない。なぜなら村内には「外来者」が基本的にいないからである。サン・マルティンでは、村出身者と婚姻関係にある者をのぞいては、土地を「外来者」に渡すことはなく、「外来者」が安易に居住することはできない。すなわち、「ナティーボ」を意味する自称を生成させる他者は村内にはいないのである。

(二) カトリックの祭礼

村役場をはじめとする行政的な仕事は、基本的に村に居住していなければできない。しかしカトリックの祭礼遂行は、

村外に移住した者でも担えるものである。植民地時代、広くカトリックの布教が行われたメキシコでは、どの村、町、市にもその中心にはカトリック教会がある。サン・マルティンも例外ではなく、カトリック教会、教会に置かれている聖像、その聖像をまつる祭礼は、村人にとってたいへん重要である。移住者にとっても、移住先にカトリック教会はあるものの、出身地の教会と聖像がより深い信仰の対象であることが多い。

サン・マルティンからメキシコ市へと流出した移住者は、以前から祭礼のために献金はしてきたが、一九九〇年代初頭から、祭礼遂行の最高責任者である第一マヨルドモ (primer mayordomo) の役も担うようになった。サン・マルティンから移住した者でも、時に帰郷し、村在住者に快く迎えられることを望むなら、村在住者と同様に、村のために無償もしくは金銭的負担を承知で義務的な役職、すなわち「カルゴ」を担わなければならない。祭礼のマヨルドモの役は、都市にいなながらそれを実現するものである。

(三) 墓地

村居住者が、サン・マルティンの墓地に埋葬が許されるかどうかを心配しているのは、一〇年以上のつきあいの中で見たことがない。しかし村外へと移住した者に関しては、村の墓地に死者の埋葬を望む遺族に対して、村役場が献金を求めることがあるという。そのような事態にならないようにと、移住先の都市から村役場に献金をする、あるいは村の祭礼遂行のために協力、献金するなど、「村への貢献」をしている都市移住者は存在する。また、メキシコ市に在住するサン・マルティン出身者が、村の墓地拡張のために募金活動を行ったこともある。それは自分たちの埋葬先を村に確保しようとする行動だと思われる。このように、都市移住者の村への埋葬は、無条件ではない。

(四) 水利

村にはいくつかの集落があるが、少なくとも中心部では川の水を各家屋の前まで引き、そこに蛇口を取り付けている。家屋内に洗面台や流し台を所有する者はほとんどいない。水を引くための土木作業も村居住者が協力し合って行うものである。こうした短期の肉体労働による村への奉仕は「テキオ (tekio)」と呼ばれているが、これは年単位の村への無償奉仕である。「カルゴ」と本質的には同じものといえる。畑の灌漑設備は全世帯にあるわけではなく、設置できるかどうかは各世帯の経済状況による。

都市移住者は村居住者と水をめぐって争うことはない。また、村内には、村人が成員と認める、あるいは認めていなくても例外的に居住を許可した者しか暮らしていないので、村内で水の権利を縁のない「外来者」との間で争うことはない。さらに、居住人口が一〇〇〇人にも満たないことも影響していると考えられるが、村内の居住者同士で水利権をめぐって争った事例を聞いたことはない。隣接する村との間においても、少なくとも一九九〇年から二〇〇一年の間には水利権をめぐる葛藤について耳にしたことはない。^⑦

(五) 共同利用地

サン・マルティンの土地は、国家によって、共同利用地のひとつであるティエラ・コムナルという法的地位を与えられている。ティエラ・コムナルは、共同体の成員だけの共同利用地であり、外部の者に売ったり、譲ったり、あるいは外部に対して抵当に入れることは法律上認められていない。しかしサン・マルティンのティエラ・コムナルのうち、森林をのぞく耕作地は、村人みずからによって村の個人々に分割されていて、私有地同然に扱われている。また村人同士の間では売買も行っている。こうした、共同体内の成員間の事実上の売買はサン・マルティンに限らず、メキシコで広く行われていると考えられる。では誰を共同体の成員とするのか。サン・マルティンの場合、サン・マルティン出身者もしくは外部

出身でもその配偶者である。こうしたサン・マルティンの土地の共同利用(耕作地の事実上の所有)は、村落内に暮らす住民のアイデンティティを、「村の者」であることにさせる大きな要因である。

第二節 メキシコ市内旧先住民村落とオアハカ州先住民村落の類似性

ここまでの記述からもわかるように、メキシコ市内旧先住民村落の「ナティーボ」と、オアハカ州の先住民村落の人々が有する組織や価値観にはいくつもの共通項がある。

まず、カトリックの祭祀についてであるが、これに関してははっきりとした類似性が存在する。旧先住民村落の「ナティーボ」たちは、オアハカの村落出身者同様に、祭祀遂行において中心的役割を果たしている。違いは、前者が「ナティーボ」だけでなく、「外来者」からもある程度の献金を受けている点である。オアハカ州の先住民村落の場合、都市移住者からの献金をあてにしているが、村出身者とその配偶者でない者からは献金を受けていない。

墓地と埋葬については、ある程度の類似性がある。旧先住民村落では、墓地によっては「ナティーボ」が優遇されているが、「外来者」との間に権利に差がないところもある。サン・マルティンには「外来者」が埋葬されることは基本的にない。いずれにしても、共通しているのは、いずれも「自分の『村』の墓に埋葬されたい」と望んでいることである。サン・マルティンから移住した者も、その多くは死後村で埋葬されることを望んでいるという^⑧。

水利については両者にあまり共通項はない。旧先住民村落のなかでもすでに都市化された地域では、上下水道が整っていて、「ナティーボ」が関わる余地はない。豊富な湧き水などの水資源があり、そこに「ナティーボ」が多く住んでいれば、湧き水利用の主導権を「ナティーボ」がおもに握ることもある。とはいえ、湧き水利用を制限された「外来者」は、民間会社からの給水を受けて、屋上のタンクに水を貯めればそれで生活ができるのであり、特に「ナティーボ」と「外来者」間の葛藤の元となるわけではない。サン・マルティンに関しては、村を流れる川の利用に関して特に資格上の制限は

ない。お金が出せないなどの理由で、川から自宅庭先まで水を引き込んでいない家は存在する可能性がある。しかしその場合は、川や泉まで水を汲みに行けばいいのである。

共同利用地については、いずれも成員に制限を設けている。すなわち、共同利用地が今も存在する旧先住民村落の場合には、「ナティーボ」がそれを利用する成員であり、新たな成員を加える場合でも、現成員の承認が必要である。サン・マルティンの場合、「外来者」は基本的に村の土地（前述のようにすべて共同利用地である）で耕作や放牧をしたり、木の伐採をすることは許されない。

このように、市内旧先住民村落の「ナティーボ」の組織や価値観は、オアハカの「先住民」村落のそれと類似している。しかし、彼らは「先住民」と呼ばれていないし、また、彼らの自称のなかにも「先住民」や、あるいは「オトミー人」というものはない。市内旧先住民村落の「ナティーボ」とサン・マルティンの人々の間で、もともと異なるのは、「外来者」と同じ土地で暮らしているかどうかである。メキシコ市内旧先住民村落は、もはやその境界線を失い、旧来の住人は多数の「外来者」とともに暮らしているからこそ、「ナティーボ」という自称が生まれていることはすでに記述してきた。

もともと旧先住民村落における「ナティーボ」の範疇や境界は、「民族集団」の範疇同様にあいまいなものである。状況によって「ナティーボ」の範疇に入る可能性のある者として、以下のような人々を想定することができる^④。

- (一) ある旧先住民村落に何世代も前から暮らしている家族の成員として、地区内で生まれた者
- (二) (一)の配偶者
- (三) (一)の家族だが外部に流出し、それでもなお「ナティーボ」であることを望む者
- (四) 外部出身でもその地域に何年も暮らし、祭礼その他の行事や組織に関わっている者
- (五) (三)、(四)に該当する人物の配偶者やその子孫

これら五つのタイプのうち、(一)はもつとも問題なく「ナティーボ」と見なされる人々である。ただし、祭祀や行事に、献金を含めまったく関わらなければ、地域墓地への埋葬など、「ナティーボ」としての権利は得られないという可能性がある。(二)以外の人々は範疇に入らない場合があるようである。(三)のタイプに相当する人々から「ナティーボ」同然の扱いを受けるか否かは、祭祀遂行組織への協力などを通して地区の行事に参加・貢献することを示し、それが他の「ナティーボ」たちによって認められるかどうかにかかっているものと思われる。一方、主観的に自らを「ナティーボ」とみなすかどうかは、誰を他者として認識しているかにも影響される。たとえば、(四)や(五)に相当する人物は、(一)のような人物の前では自分は「ナティーボとは言えない」と感じるかもしれない。しかし、筆者のよくな完全なよそ者を相手にしている時は、「ナティーボ」として振る舞うことができる。

他方、外部から移り住み、村の行事や祭祀に深く関わらず、「ナティーボ」とほとんど付き合ひもしない住人、すなわち、豪邸や豪華なコンドミニアムに暮らすような裕福な人々は、決して「ナティーボ」と呼ばれることはない。またそのように呼ばれることを望んでもいない。

ここまでの記述からわかるように、メキシコ市内の旧先住民村落には「ナティーボ」と自称する人々のコミュニティが存在する。「ナティーボ」は居住地区における祭祀および(地区にもよるが)死後の埋葬地という非日常的世界において特権を有しており、また積極的に関わって貢献している。一方で、裕福な「外来者」はそのような「特権」に執着はないように見受けられる。それは「ナティーボ」や、将来「ナティーボ」になり得るような、他州の農村部から流入した「外来者」にとつてのみ意味のある行為である。彼らはそうして、自分が安心して帰属できる居場所を得ているのである。

- ① 詳しくは、禪野美帆「メキシコ、先住民共同体と都市——都市移住者を取り込んだ「伝統的」組織の変容——」二〇〇六年(前掲)参照。
- ② 一九九四年に村で作成された統計では、その時点での居住地にかか

わらず、「村で出生登録を行った者」が数えられていたので、著しく数字が異なる。また一九七〇年代に、内部の一集落からアヘンシア・ムニシパル(Agencia municipal)と、半独立的な地位を得た、トト

メンドという地域は村役場作成の統計に含まれていない。

- ③ 移住の要因については、禪野美帆『メキシコ、先住民共同体と都市——都市移住者を取り込んだ「伝統的」組織の変容——』二〇〇六年（前掲）、一七一一—一七二頁参照。

- ④ Kortsbaek, Leif. *Introducción al sistema de cargos*. Univ. Autónoma del Estado de México: Toluca, 1996. pp. 58-59.

- ⑤ 禪野美帆『メキシコ、先住民共同体と都市——都市移住者を取り込んだ「伝統的」組織の変容——』二〇〇六年（前掲）、一六九頁。

- ⑥ 二〇〇〇年当時七〇代後半だったサン・マルティンの女性は、「子どもの頃、祖父母はミシユテコ語を話し、父母は夫婦間ではミシユテコ語を話していたが、子どもにはスペイン語でしか話しかけなかった。そして自分はミシユテコ語が少ししかわからず、いくつかのフレーズを言える程度である」と語った。この女性がこの状態で「ミシユテコ

語を話せる」と国勢調査に答えたかどうかはわからない。

- ⑦ サン・マルティンを含む一帯は、乾期にはかなり乾燥するにもかかわらず、村内でも、また隣村とも水利権をめぐる争いがないのは、

(一) 川や泉の水量がこの地域では豊富であるか、(二) 多くの人口が外部に流出して、水の使用量が少ないか、または、(三) 地域内に居住している人々が外部からの送金に頼り、もはや農業にあまり依存していないため、水の使用量が少ないといった仮説が考えられる。

- ⑧ 禪野美帆『メキシコ、先住民共同体と都市——都市移住者を取り込んだ「伝統的」組織の変容——』二〇〇六年（前掲）、一〇三—一〇四頁。
- ⑨ この点については、禪野美帆・井上幸孝『メキシコ市内旧先住民村落における「地元民」と「外来者」の関係』『メソアメリカにおける民族的アイデンティティの揺らぎ』二〇〇五年（前掲）においてすでに述べたが、本稿の論旨においても欠かせない。

結語 新たな呼称「オリヒナリオ」の誕生

これまでの記述で明らかのように、メキシコ市内旧先住民村落の「ナティーボ」の価値観や組織は、地理的に離れた「先住民」と似ている^①。それにもかかわらず、メキシコでは一般に彼らを「先住民」として扱うことはなかった。同時に、「ナティーボ」たちは自らを「インディヘナ（先住民）」と称することもない。それはなぜなのか。それは、「インディヘナ」という語が、メキシコにおいて、「可哀想な、搾取された、貧しい」というネガティブなイメージに結びつけられることが頻繁に生じているからだと考えられる^②。

しかし、「ナティーボ」の歴史性、伝統、権利などについて、同じ地区で暮らす「外来者」との関係だけでなく、メキシコ市の市民一般、メキシコ政府、あるいは海外の人々との関係において論じる時、あるいは、政治的に主張する時、

「先住民」という呼称や自称を使用しないのであれば、どのような言葉を使えばいいのか。このような場合に使われる新たな用語が、二〇世紀の終わりに生まれた。それは「オリヒナリオ *originario*」である。この語は「出身の／もともの」という意味を持つている。メキシコ市の旧先住民村落にルーツをもつ居住者を形容するのにこの語を使用することを誰が最初に思いついたのか、これまでのところ明確ではない。しかし、モラは、一九九四年にチアパス州で起きたサパティスタ民族解放軍 (EZLN) の武装蜂起と、続く一九九六年の「先住民の諸権利と文化に関するサン・アンドレス合意」署名後、同じ一九九六年にメキシコ市内のミルパ・アルタ区で開催された「アナワクのエエプロス・オリヒナリオと先住民移住者フォーラム *el Foro de Pueblos Originarios y Migrantes Indígenas del Anáhuac*」において初めてエエプロス・オリヒナリオスという呼称が使用されたと記述している。この時この呼称は、「自分たちの土地所有の正統性」を政治的に示すものであったという。^③「インディヘナ」が「搾取された」、「貧しい」というイメージある一方で、オリヒナリオは、「自分たちこそ主である」という部分が強調されているように聞こえる。この語はメキシコにおいてポジティブな響きしかない。

このような新たな呼称が生まれると共に、その呼称を使った研究業績が、第一章第二節で紹介したように、まさにブームという様相で増えてきた。同時に、メキシコ市政府によって、「メキシコ市のエエプロス・オリヒナリオス *Pueblos Originarios de la Ciudad de México*」というウェブサイトが二〇〇七年に開設された。そこでは市内四七の旧先住民村落を紹介されている。^④ウェブサイトの開設の背景には、メキシコ市の民主化と多文化主義が進んでいることを現メキシコ市政府がアピールしようという狙いと、観光資源としても活用していこうという意図があるのかもしれない。

しかし「オリヒナリオであること」は、数年前まで旧先住民村落の「ナティーボ」にあまり意識されず、その権利や文化的アイデンティティを主張する運動が活発に行われてもこなかった。ほとんどの旧先住民村落の住人は「オリヒナリオ」という呼称に無関心と思われた。一九九五年に筆者がはじめてエエプロ・ロス・レイエスを訪れた時から二〇〇九年

まで、調査地区でその言葉を聞いたことはなかった。しかし、二〇一〇年になって、「ナティーボ」の口から、「オリヒナリオ」という言葉が聞かれる機会が増えてきた。

二〇一〇年八月、プエブロ・ロス・レイエスにおける一年のうちで最も重要な祭礼において、聖像を担いで行列の最中、祭礼遂行責任者であるマヨルドモの役を務める男性が、ラ・カンデラリアなど近隣地区の住人も含めた聴衆に向けて行ったスピーチにおいて、このような言葉が出てきた。

「私も少し前まで知らなかった。私たちは、プエブロ・オリヒナリオなのです。」

このスピーチには実はメキシコ人研究者の活動も影響している。前述のようにメキシコにおいて「プエブロス・オリヒナリオス」を対象にした研究書や論文の出版が続いている。プエブロ・ロス・レイエスにもメキシコ人類学者が調査に訪れており、そうした研究者を通して関連書の出版や新たな呼称を知っている人物がいるのである。

そして二〇一〇年九月、他州の「先住民」もそのように呼ばれるようになる兆候を筆者はメキシコで見いだした。「メキシコには先住民もいる、ではなく、メキシコは多民族社会 (multicultural) なのだ」と、「そのような国をつくるべきだ」と、そのような主張において、「インディヘナ」は「オリヒナリオ」と呼び換えられ始めた^⑤。ただ、筆者の予想では、この名称は、自称としてはおそらく、居住地区内に後からやってきた他者、すなわち「外来者」と共存している地区でまず使われることになるだろう。近くの他者とさまざまな利権や、自尊心をめぐってせめぎあっている地区、人々こそ、自分が何者であるのか同定する必要に迫られている。

メキシコの「先住民」および「民族集団」、またその文化は、これまでの記述から明らかなように、その歴史や人々の本質からのみ定義できるものではない。同じ居住地区に暮らす他者、居住地区外部の他者、市や国家、研究者との関わり、

今回の事例では大きな影響はないが、他国や国境を超えた外部団体などとの関係において、常に現在進行形で生成されている。

- ① もちろん、「先住民」の価値観や組織は、先スペイン期そのものはずはなく、五〇〇年以上続いた植民地的状況を経てつくられたものである。
- ② メキシコ独立二〇〇周年・革命一〇〇周年を機会に二〇一〇年に作られたテレビ番組『*Discutamos México 2010*, programa 104』において、歴史学者 Maria Alicia Mayer は「インディヘナは貧困や無知の同義語になってしまっている」と述べていた。
- ③ Mora V., Teresa (coord.), *Los pueblos originarios de la ciudad de México: Atlas etnográfico*, 2007 (雑誌), p. 27.
- ④ <http://www.pueblosoriginarios.dfgob.mx/1sta.html>
- ⑤ 先述のテレビ番組『*Discutamos México 2010*, programa 104』において、進行役を務めた著名な歴史学者 Miguel León-Portilla は「インディヘナ」の代わりに「オリビナリオ」という呼称を積極的に使用していた。

(関西学院大学商学部准教授)

The *Nativos* of the Former Indigenous Villages in Mexico City in Relation to the Definition of “Indigenous Peoples”

by

ZENNO Miho

There are many former indigenous villages located within Mexico City. Their number is said to total 291. These former settlements of indigenous people are today urban neighborhoods in which newcomers with no ties to the place as well as the original inhabitants reside. Living together with others in these circumstances, the original inhabitants began to call themselves *nativos*. Although the term *nativos* shares the same roots with the English term “natives”, it does not mean indigenous peoples, but is used to mean “those who were born in the area”. The *nativos* call the inhabitants who have moved into the area *avecindados* or *residentes*.

The *nativos* have their own social organization and sense of values that are similar to those of the people of an indigenous village in the State of Oaxaca whom the author has previously investigated. In regard to ritual ceremonies in particular, such as Catholic festivals or *fiestas* and funerals at local cemeteries, they have privileges as well as a strong sense of duty. Nevertheless, the *nativos* of the former indigenous villages of Mexico City are not called *indígenas* by others nor do they call themselves that.

From the late 1990's, however, they have begun to be called *originarios*, and in recent years, the term *originarios* is more commonly used for self-reference by the *nativos* of various former indigenous villages of the capital. The word is rarely used when they are conscious of newcomers, *residentes*, but it is utilized when they need to appeal for their right to maintain or strengthen their tradition, culture and the use of their communal land. In other words, *originarios* is more a political term that has been applied by the *nativos* when addressing others outside their residential area, such as government officials and governmental or academic associations. The appellation *originarios* provides a sense of legitimacy and a positive connotation in Mexico. The word *indígenas* contains on the other hand a negative image that is often linked with “poverty”, “ignorance”, and “exploited people”.

In terms of definition, as it is clear from this case study, both the words

nativos and *originarios* are not associated with any ethnic group in Mexico. In the face of statistics, they are “citizens” of the Mexico City and the United Mexican States. The “classification” of indigenous peoples as well as ethnic groups are not defined essentially by their traditions or culture, but historically constructed, depending on the social circumstances and who constitutes “the other.”